

まほしき夕ばえどもなり、そのうち御みきなどらうがはしきまできこしめし、さうときつゝ夜ふけて歸らせ給。

〔増鏡老の撰〕九月二年弘安の供花には、新院深草さへわたり物し給へば、いよゝ女房の袖うち心こどによういくはへ給、御花はつれば、兩院草龜山ひとつ御車にて、伏見殿へ御幸なる、秋山のけしき、御らんせさせんとなりけり、上達部殿上人かなたこなたおしあはせて、色々の狩衣すがた、菊もみぢこきませせてうちむれたる、見どころおほかるべし、野山のけしき色附わたるに、伏見山田面につくくうぢの川浪、はるくくと見わたされたるほぞいとえむなるを、わかき人々などは身にしむばかり思へり、こたかつかさ殿の大殿もまゐり給べしと聞えけるを、御物いみとてとまり給へれば、五葉の枝に付て奏せられける。

伏見山いく萬代も枝そへてさかえん松のすゑぞ久しき御かへし

さかゆべき程ぞ久しき伏見山おひそふ松のえだをつらねて、又の日は、ふし見の津にいでさせ給て、鶺鴒御らむじ、白拍子御船にめし入て、歌うたはせなとせさせ給ふ、二三日おはしませば、兩院の家司ども、我おとらじといかめしき事どもてうじてまゐらせあへる中に、楊梅の二位兼行、ひわりこどもの心ばせありて、つかうまつれるに、雲雀といふ小鳥を萩の枝に付たり、源氏の松かせのまきを思へるにやありけん、爲兼朝臣をめして、本院かれはいかゝ見るとおほせられければ、いと心え侍らずとぞ申ける、まこと定家の中納言入道がかきて侍る源氏のほんには、萩とは見え侍らぬとぞうけ給りし、かやうに御中いとよくて、はかなき御あそびわざなども、いとましきさまに聞えかはし給を、めやすき事になべて世の人も申けり、

〔經任卿記〕弘安六年三月七日、先參新院山龜而御幸之間也、爲花御歷覽云々、仍參本院深草仰云、只